

武藤禎夫編

嘶本大系

第十一卷

東京堂出版刊

編者略歴

大正十五年、東京に生まれる。東京
大学国史学科卒業。朝日新聞社出版
局勤務。出版校閲部次長、日本古典
全書編集長を歴任。編著に『江戸小
咄辞典』『落語三百題』『江戸小咄の
比較研究』（東京堂出版）『昨日は今
日の物語』（平凡社東洋文庫）『日本
小咄集成』（共編、筑摩書房）『軽口
咄本集』（古典文庫）など。



新本大系 第十一巻 定価七八〇〇円

昭和五四年 三月二〇日 初版印刷
昭和五四年 三月三〇日 初版発行

編 者 武 藤 禎 夫

発行者 岩 出 貞 夫

印刷所 理想社印刷所

製本所 協和製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三十七(〒100)
電話 東京 三三一七四 振替 東京 三二七

凡 例

第十一巻には、安永篇のⅢとして、安永六年以降に出版された主要な噺本二十六種を所収する。『鹿の子餅』を契機に笑話ブームが起り、競い合つて多くの佳作を発表した連衆たちの創作笑話熱は、やや下火となったものの、依然継続的に小咄本は刊行された。大田南畝に代表される著名な文人たちが関与する小咄本が、専門書肆から出始めたのもこの時期である。先行話の再出や嗣足改題再板本の出刊などで、内容的にはややマンネリ化した、安永小咄の高水準は保っている、未翻刻分を含めて紹介することにした。

まず、書名と刊・序年、作・序者名、画家名、板元、書型、底本の所蔵文庫（架蔵本は省略）などを記した。この場合、書名は、内題・序題・題簽などによつて記し、刊記のないものは序の年月を示した。江戸以外の板元は地名を付し、相板のときは「○○等板」とした。また、原本の体裁を知るため、本文巻頭をカットで示した。

翻刻にあたっては、底本の忠実な活字化につとめると同時に、読み易いものにするよう努力した。その方針は、概ね次の通りである。

- 1 本文の行移り・丁移りは、底本に従わなかった。ただし、底本の各丁の終りにあたる所に、版心の丁付により、丁数を括弧内に漢数字で示した。例えば、一丁の表と裏は（一オ）（二ウ）で示し、挿絵が続く場合は（一オ）（二ウ挿絵）、（二オ）（三ウ―二オ挿絵）などとした。底本に丁数を欠くときは、洋数字で実丁数を記した。
- 2 句読点は、底本にとらわれず、私見によつて、句読点・並列点を施した。

- 3 小文字や割り書きは、人名とか評語、ト書きなど、意味のある場合のみ再現し、他は本文に組みこんだ。歌

句は、理解しやすいように、改行した場合もある。

4 仮名について

イ 仮名の字体は、現行の平仮名・片仮名に統一した。「リ」「り」、「ヤ」「や」、「セ」「せ」などは判別しにくいため、概ね平仮名にした。また「江」「子」は「え」「ね・ネ」とした。ただし、当時平仮名の意識で使用されていた「ミ」「ハ」「ニ」は、読み易さを考え、そのまま残した。小文字の送り仮名は、概ね大きくした。

ロ 特殊な合字・連字は、現行の字体に改めた。(例、ノ↓シテ、ふ↓さま)

ハ 仮名遣いは混乱しているが、底本通りとし、歴史的仮名遣いには改めなかった。

ニ 本文の清濁は、底本では、当然濁点のあるべき所に、ない場合が多いが、私に加えることはせず、底本通りとした。ただし、濁点の位置のずれは正した。(例、おとがし↓おどかし、こどく↓ごとく)

ホ 誤字・誤刻と思われる仮名も改めず、行間に(ママ)(○○カ)と注記した。

ヘ 衍字と考えられるものも削らず、(ママ)(○○衍)と注記した。

ト 振り仮名も底本の通りとし、削除したり補わなかった。「限り」などの衍字もそのままとし、「空」などもした。ただし、位置のずれは正した。(例、奈良↓奈良)

5 漢字について

イ 字体は原則として新字体を用い、新字体のないものは通行の旧字体を使った。ただし、固有名詞などで、底本のままにした場合もある。

ロ 異体字は、できる限り、新字体または通行の旧字体に改めた。(例、泰↓松、喜↓喜、秋↓秋、遠↓遠、煮↓煮、庵↓庵)しかし、該当する字のない場合(例、姥、涙、娘)は、そのまま残した。

ハ 宛字及び通行の久しい文字は、注記せずに残した。(例、百姓―百姓、有時―或時、内陳―内陣)ただし、極端なものは(ママ)とか、正しい字を()内に注記した。

ニ 特殊な草体・略体は、通行の文字に改めた。(例、ハ↓候、ニ↓也、ト↓被、ミ↓給、フ↓部、井↓菩薩、厂↓雁、广↓磨・摩)

ホ 誤字・誤刻と思われるものはそのままとし、注記を施した。

6 反復記号は、底本にしたがい、「ム」「レ」「ミ」「ノ」の四種を使用した。

7 挿絵はすべて収録した。(ただし、本巻所収の『豆談語』は大半が艶画のため、その一部を示し、他は挿絵の挿入丁のみ記した) その位置は、該当する咄の中か、近い場所に挿入し、原本での丁数も明記した。後人のいたずら書きなどは消したが、他は修整を加えなかった。なお、挿絵やカット用の本文巻頭写真で、原本には匡郭のないものもあるが、体裁上、枠で囲った。

8 序文中の印や、奥付・刊記などは、できる限り、原形を示した。また、『御笑酒宴』などの漢文の序は凸版で示した。

9 底本の虫損・汚損などで判読できぬ箇所は、同一板本で補えた場合は特に注記をせず、推定しうる場合は(〇〇カ)と注記し、全く不詳のものは、空白のままとした。

10 題名のない場合は、一行空きとして仮題は付さなかった。全篇無題の書は、検索の便を考え、各話の冒頭に、それぞれ洋数字で、通し番号を付した。

11 謡の詞章に付したゴマ点や、特殊な囲みなどは削除した。文中の特別な図柄は、凸版で示した。

12 諸本などで、話の異同や出入のため特記を要するものは、補遺の形で、巻末の「所収書目解題」に付加した場合がある。

13 嘶本に多く見られる嗣足改題再板本は、出来る限り元板を紹介した。ただし、本巻所収の『いかのぼり』のように、元板の全部を再板本が所収する場合などは、改題再板本の方を採り上げた。両者の関連は、大凡解題で触れたが、主要なものは、第十九巻末の「嗣足改題本」の項に一括した。

- 14 第十六卷までは、刊行の年代順に収録し、絵入りや特殊な喃本を、第十七卷以降に特集した。
- 15 各巻末に「所収書目解題」を付した。ここでは、簡単な書誌と、諸本の異同や嗣足改題再板本との関連などを略記するにとどめた。
- 16 できる限り完本の紹介を心がけたが、一部が落丁や汚損で不備なものも、未翻刻で内容のよいものは、あえて所収した場合もある。

底本に使用した原本は、主として公共の図書館・文庫や大学の研究室・図書館所蔵のものであるが、一部は架蔵本も用いた。完本を求め得ず、二、三の本を併せ用いた場合もあるが、その一々は記さなかった。

第十一巻で、原本の閲覧と公刊を許可された図書館・研究室は次の通りである。記して深く謝意を表する。

東京大学国文研究室・同国語研究室・国立国会図書館・都立中央図書館加賀文庫・大東急記念文庫

嘶本大系 第二期全八卷

(既刊)

*第一卷 寒川入道筆記 戲言養氣集 昨日は

今日の物語 わらいくさ 百物語

*第七卷

口ひやう金房

軽口あられ酒 露休置土産 軽口星

私可多咄

鉄炮 軽口福蔵主 軽口出宝台 軽

*第二卷 醒睡笑 理屈物語

一休咄 一休閑東咄 狂歌咄 かな

口はなしとり 軽口機嫌袋 座狂は

めいし 竹斎はなし 一休諸国物語

蓬萊山 水打花 軽口もらいゑくぼ

*第四卷 秋の夜の友 囃物語 杉楊子 新竹 *第八卷

軽口初売買 軽口福おかし 軽口春

斎 籠耳 二休咄 諸国落首咄

ふくろ 軽口耳過宝 軽口わかえび

*第五卷 宇喜蔵主古今咄揃 当世軽口咄揃

す 軽口臍順礼 軽口瓢金苗 軽口

当世手打笑 当世口まね笑 野鹿武左

笑布袋 軽口浮瓢箪 軽口腹太鼓

衛門口伝咄 鹿の巻筆 正直咄大鑑

軽口福徳利 軽口豊年遊 口合恵宝

当世はなしの本

袋 軽口東方朔 軽口扇の的 軽口

*第六卷 枝珊瑚珠 露がはなし 遊小僧 初

はるの山 軽口片頬笑

音草嘶大鑑 露新軽口はなし 露の

平均三二〇頁

五郎兵衛新はなし 軽口御前男 軽

定価 各巻六八〇〇円

目次

凡例三

蝶夫婦（安永六年正月刊）	三
春帋（安永六年正月刊）	七
管卷（安永六年正月刊）	二五
時勢話大全（安永六年正月刊）	五三
時勢話綱目（安永六年正月刊）	七四
喜美賀樂寿（安永六年正月序）	九四
さとすゞめ（安永六年正月序）	一〇六
譚囊（安永六年序）	二九
春笑一刻（安永七年正月刊）	二五
乗合舟（安永七年正月刊）	四七
今歳笑（安永七年正月序）	六〇
福の神（安永七年正月序）	七五

鯛の味噌津 (安永八年正月刊)	二六
寿々葉羅井 (安永八年正月刊)	一九
気のくすり (安永八年正月刊)	二六
御笑酒宴 (安永八年正月序)	三〇
金財布 (安永八年正月序)	三七
万の宝 (安永九年正月刊)	二四
大御世話 (安永九年正月刊)	二六
明朝梅 (安永九年正月刊)	二七
初 登 (安永九年正月序)	二八
鼠の笑 (安永九年正月序)	二九
笑長者 (安永九年正月序)	三〇
はつ鯉 (安永十年正月序)	三三
いかのぼり (安永十年正月序)	三三
豆談語 (安永年間刊)	三四
所収書目解題	三五

嘶 本 大 系

第十一卷
〈安永篇Ⅲ〉

蝶ちよう 夫つ 婦がい 〔序文〕

物夢ものゆめの大書
 今宵ハ初夜望のときまゐり友
 であられはれはるゝかゝるが邪けんんの
 花はなをうてゐられはるゝ花はなのゆめを
 見るといふは情なさけくゆめくはるゝはて

序

嘉辰令月、歛よろこび無極。万舌、撰集、嘯はなもいまだ央ならず。
 聞ども尽ず、読ども替らぬ（序1オ）古い咄は、西の海へさ
 らりと流し、あら玉の新しい斗を撰あたら抜ば、丁どよい程の丁
 数に成て、重畳の重て畳む（序1ウ）蝶花形、女てう男蝶の
 中もよく、初編、続篇ひとつに合、放れまいぞの蝶夫婦と、
 尔云

山手ノ馬鹿人

此楓述

（序2オ）

安永六年正月刊

山手ノ馬鹿人此楓序

遠州屋板

小本一冊



(序 2ウ)

初夢の大吉

今宵ハ初夢。ひよつとわるい夢でも見れば氣にかゝるが、邯鄲の枕をして寐れば、榮花のゆめを見るといふに依て、旧冬から聞て（初一オ）歩行たけれども、何所にもない。貴様しらぬか。へそれへない筈だ。かん鄲の枕といふへ、千年を経た南天の木で拵た物だ。へ道理で、槌屋にも丸角にもなかつた。それではどふで（初一ウ）今夜の間には合ぬ。ナント、南天の葉でハどふであらう。へされば、葉でハ合点がいかぬが、只には増だらう。先物ハ例し、葉を敷て寐て見やれといふて帰り、扱翌日早／＼行、（初二オ）へどふだ。夕部の初夢ハ。へイヤハヤ奇妙／＼。物のいらぬものだから、南天の葉をおもいれ敷て寐たれば、とんだへ夢を見た。へどんな夢だ。咄しやれ。へなんだか夜びとひ、強飯の夢を見た（初二ウ）

お国者の春袋

町のけしき賑かに、なんでござい／＼の声も長閑さ。御年玉物御望次第の看板目当に、あさぎうらの短じ小袖着た侍が、舂屋の見せへ（初三オ）上り、縞のびんろうどがほし

いといふを、手代が聞て、手前には左様な物ハ御座りませんといへば、へアニ、ねへ。おれらが国サア迄も聞へたいわき舁屋に、びんろうどがなくなつて、あんとすべへ(初三ウ)へそれでもどふも、手前には御座りませんと、迷惑そふにいふ内、脇に居る手代が心付て、側に有合た縞のひろうどを出して、是でハ御座りませんかと見せれば、侍、大に腹を立、(初四ウ)へそれほど有物を、ねへとべへいつて、アぜ、おれに売ハやあだか へイエ、憚ながら、是ハびんろうどで御座ります。びんろうどと、おはねなさりましては違ひます へム、そふだかな。そんなら、これを(初四ウ)切て貰ふべへ へハイ、何に被成ます へきちやくにする

使者の間違

使者、馬よりひらりと下りれば、門番飛んで出、くぶりをメて、大門を明に(初五ウ)かゝる。へ是く、御門には及ばぬ。使者で御座るといへども、門番、聞ぬふりにて、大門をあける。使者、あきれながら、ひらゐた大門を見れば、へ殿様のお出

時代違の長物語 (初五ウ)

義経公、雨夜の御つれ／＼に、四天王を集め給ひ、御酒宴の折から仰出されけるハ、此間篠塚いがの守が咄にきけば、東寺の羅生門に鬼神すんで、往来を悩すよし。誰かある。此(初六ウ)金札を羅生門に建置帰るならバ、家に伝へる天のから鞍、刃の太刀、何れ成とも望に任せ取らすべしと、御詫もいまだ終らぬ内、いまの四郎兼平、畏り奉ると、物の具りつば(初六ウ)に出立て、御前にひれふし、身不肖なれども、君恩をわすれぬ某、何ぞや是式に、御ほうびの望ハなし。さりながら、変化を見届参りなば、一つのお願ひ。某が詠哥の内、さゞ波(初七ウ)や志賀の都のこしおれを、千載集に加へ給らバ、此上の本望なし。六弥太どの、宜鋪お取成頼入といふ捨て、御前を立、供をもつれず只ひとり、勢田の橋にさしかゝれば、向ふの方(初七ウ)さもやんごとなき上ろうの、五ぎぬ踏したきて歩ミ寄、何を隠し申さん。我ハ此所にすむ大蛇なるが、年／＼なす所の子供を、三上山の百足に服せられ、その恨、忘れ難し。(初八ウ)何とぞ御身の弓勢にて、百足を退治て給へれと、涙とともにたのむにぞ、兼平聞て、ソレハいと安き事也。去ながら、三上山まで女の足でハ覺束なし。某負て参らせんと、かの女を(初八ウ)負ひ、半丁余り行と思へバ、大

盤石のごとくに重くなるゆへ、コハふしぎと振返で見れば、御所の五郎丸なり。女ならバ仕方もあるども、若衆の事なれば、瀬川吉三郎と名をかへて、(初九才)よし町へ影間に出した所が、大の繁昌。しかし爰にひとつの難儀へ、近所の油屋の娘おそめが惚て、付つ廻しつくどくゆへ、吉三郎も不義の悪名を付られてへ成まいと、木母寺へ逃(初九才)行、髪を切て鳴神上人と名乗り、檀上にのぼり、行ひ済して居るを、おそめが聞付、エ、恨しいといふ一念にて、廿尋あまりの大蛇となり、名にしおふ両国川を、安くとおよぎ(初十才)越して、雲のたへまと変じ、檀の下に近づき、色くさまくの恋咄しのうへ、真白な内股を出しかけて見せれば、さすがの鳴神上人も、はぎの白きを見て通を失ひ、檀上より(初十才)はたと落る所を、猪の早太が取て押へて、九刀さし通す。その時の辞世に、

へうもれ木の花咲く事もなかりしに
終に此身へとつくりとなる

今に回向院に石牌が御座ります(初十一才)

娘の成人

へお見廻申ます へ是ハ珍らしいお客。マア何と思し召て。

サアまあ、おあがりなされ へハイ。扱く御無沙汰。久しぶりてお目に懸りましたと、挨拶して(初十一才)居る所へ、節分の生壁を見るよふな大ミつちやの娘が、茶を持て出れば、へ是ハお娘子さま。三年ほどお目に懸らぬ内に、きつう御成人なさりました へイヤ、是ハとなりのむすめで(初十二才)御座ります へハテ扱、不調法を申しました。とんとお娘子さまに、貞を見て、ゆず二つで御座ります

乙姫の労咳

龍宮の乙姫君、ぶらくとのお煩ひ。(初十二才)御両親のお案じ、大方ならす。兎角お氣はらしの御遊山かよからう。先有物のお舟からと、附くがすゝめ立て、海一丸の楼舟をかさり、女中へもちろん、御家老の海老爺まで、(初十三才)端出に赤い帷子着て、さつさおせくと乗出し、品川おきへ出る所に、高輪の町を、へなまん鯨ハタ鯨やと、呼で行声を、乙姫さまが聞付給ひ、へアレ、可愛そふに、迷子(初十三才)

足留の盃

浅草市のなぐれが、二人リづれで、馴染のやたゐへ上つた

所が、ひとりの女郎ハ隙、ひとりの相方ハさして居るゆへ、名代取て居てといへども初十四才聞ず。やろうの玉子を見るよふに、かへろ／＼といふにこまり、連の所へ、かのさして居る女郎か来て、へもしへ。どふも新幸さんが、けへろうといひなんすけれども、今夜おけへしもふ(初十四)しんしちやア、下イ立ゐせん。貰いんせうとおもひすけれど、五人一座で、三人まで貰た跡でおせんすから、そう／＼ハ貰はれもしせん。後にはどふとしゐすから、居てくんなんす(初十五)よふに、おめへをお頼もふしんす。へマアそんなら、わつちが留て見やせう。何所に居やす。へ向ふ座敷でおせんす。へ新幸や／＼。へなんだ。へマアちよつと来やれ。へいめへましくつてならねハナ(初十五)へどふでも、ぬしやアけへるか。へおめへも、つもつて見なせへ。十二日の晩にもひとり寐、又今夜もめうでへとは、あんまり茶でござんす。へそうゆふ事なら、おれもけへろ。へナニサ、夫では(初十六)悪ふござんす。へマア何にしる、一っへのミやれ。さそうといふながら、懷より何やら黒い粉薬のよふなものを取出して、盃の中へ入て吞せれば、新幸ハその酒をのむとたちまち(初十六)ぐにやと成て、へイヤ、今からけへるでもねへ。イツソ寐ていこう

よ。へそれでこそ新幸先生。大のきまりと、大さわざに成り、座敷もおもしろく、床が廻れば、かの女郎がこそと来て、へ先ほどは(初十七)大におせわさんでおせんした。モシエ、夫に付て、ぬしにお聞もふしんす事がおせんす。さつき見て居るすりやア、何だか黒い物を新幸さんにのませなんしたら、あれ程にいゝなんした物が、(初十七)直にきけんが直つて、居る氣に成なんしたが、ありやア何といふ薬でおせんす。有なら、ちつとおくんなんし。へアレハ大事の薬さ。今度持て来てあげう。へありやアまあ、何でおせん(初十八)すへ。へ朝比奈の黒焼さ

盗人の恋風

まんまと家尻を切て、這入て見れば、弁天さまのよふな女がたつた一人、苧をうんで居る。襟元の美しさ。(初十八)盗人も襟元がぞつぞとして、どふもこたへられぬゆへ、そろり／＼と後へ廻り、小声に、へもしへ／＼といへば、かの女振向て、へ誰じやといふ。盗人、指をくわへながら、へぬす人さ。へナニ、うそばつかり(初十九)へくわへたゆを付、大せいもん